

までの間十五日ばかりを盛り之時とす、其後下りて宇治川に到る、こゝには夏至小暑の間をさかりとす、また一説に云、小滿の後、四日五日の間、宇治勢田西賀茂北宇喜多社、及水上村に螢多くあり、一時の壯觀なりといへり、東國には、下野佐野を名所とす、

源重之

〔後拾遺和歌集三〕ほたるをよみ侍りける
をともせで思ひにもゆる螢こそ鳴虫よりも哀なりけれ

宇治前太政大臣卅講の、ち歌合し侍けるに、ほたるをよめる、
藤原良經朝臣

澤水に空なるほしのうつるかともゆるは夜はのほたるなりけり

〔後奈良院御撰何曾〕秋の田の露おもげなるけしきかな 螢

〔新撰字鏡〕虫 蛙 注音、謂虫物、積壞衣者、如白魚等、乃牟之。

〔倭名類聚抄十九〕蠹 說文云、蠹乃牟之、木中虫也、

〔箋注倭名類聚抄八〕蠹 新撰字鏡、蛙乃牟之、今能登俗呼衣魚爲乃乎之、伊豫俗呼乃之、皆乃牟之轉、

而訓衣魚與訓蠹古今不同耳、今俗呼蠹爲木食蟲、略 原書蝨部同、陳藏器曰、木蠹一如蟻、節長

足短、生腐木中、穿木如錐刀、至春羽化、一名蝸、爾雅云、蝸、咭、蝸注云、木蠹也、蘇敬以爲蟻、蟻、節長

羽化爲天牛者、宜併見上蟻及蟻、

〔槿囊抄〕蠹 字丁護反、古文ニハ蠹ト書ク、ノシト讀也、木蟲トモ云、又ハ白魚共云、皆是ノンシ也、

其國ニ居テ其國ヲ亡ス蠹ノ其木ヲ喰テ、其木ヲ枯スニ喩ヘタリ、今シト云是也、私ニ思ハク、木

ヲ喰ノンシニハ、木蟲ヲ用ヒ、紙ヲ食ノンシニハ、白魚ヲ用ベキ歟、蠹字何レニモ亘ベキ也、

〔重修本草綱目啓蒙二十八〕蠹 木蠹蟲 ノムシ和名 キクラヒムシ キクヒムシ ゴトウムシ 信州

諸木身中ニ生ジ、内ヨリ木ヲ食フ長蟲ナリ、形ハ鳥蠹ノ如シ、木ニヨリテ其效異ナリ、故ニ下ニ各

木蠹蟲ヲ出シ、初ニ總名ヲ舉テ木蠹蟲ト云フ、皆後ニハ羽化シテ天牛、叩頭蟲、飛生蟲ノ類トナル、